加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="3">団体名</td><td>和</td><td>国際地図学協会</td></tr>
<tr><td>英</td><td>International Cartographic Association　（ICA）</td></tr>
<tr><td>団体 HP（URL）</td><td>https://icaci.org
（日本学術会議が加盟していることの記載　有　・　無　）</td></tr>
<tr><td colspan="2">国際学術団体における最近のトピックについて
（学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等）</td><td>UN-GGIM（United Nations - Global Geospatial Information Management）に参加し，地図学および地理情報科学を通して SDGs の達成に貢献している．SDGs を達成するためには，政府や人々がそれぞれの課題を理解し，その解決に向けた進捗を確認する必要があるが，その理解や確認に有効な方法のひとつが，SDGs に関連する地理的データセットをマッピングし可視化することであり，2020 年には，国連と国際地図学協会との連名で "Mapping for a Sustainable World" を刊行した．
世界各地において 900 名から 1500 名程度の参加者を得て，国際地図学会議を隔年で開催している．2019 年は東京において開催し，2021 年 12 月にはイタリア・フィレンツェにおいて開催（オンラインとのハイブリッド開催）する予定．</td></tr>
<tr><td colspan="2">当該国際学術団体の対応する分野の学術の進歩に貢献した事例</td><td>・ICT の進展と普及により世界中の人々が地図表現に触れる機会が飛躍的に増えており，近年空間的思考の重要性が指摘されていることからも，地図は現代のコミュニケーションの重要な方法となっている．COVID-19 パンデミックに際しても，地図による情報整理が非常に有用であることが示されている．しかしながら，適切な情報伝達のためには留意すべき点が多く，社会のコミュニケーション基盤に関わる分野として，地図学および地理情報科学はその重要性を増している．
・地図は現実と人間とのインターフェイスであり，理解をまとめ，意思決定をサポートし，人間の行動，思考，計画，空間理解の能力を拡張するものである．したがって，人類が地球の健全さの状況を理解するために，また，SDGs が掲げる社会的包摂，経済成長，環境の持続可能性を達成するためにも，不可欠なものとなっている．そのことを反映し，国連と ICA との連名で "Mapping for a Sustainable World" が刊行されている．
・地図表現の基本操作である記号変換，投影変換，縮尺変換の方法が地図分野として絶え間なく改良されており，特に近年では「地形の凹凸表現」がさまざまな分野の主題図のベースマップとして用いられるようになっている．
・地図学および地理情報科学は，文・理・芸術を横断・融合する，総合的な学問である．2 年に 1 回開催されている国際地図学会議に合わせて，国際子ども地図展が開催されており，世界各国の各年代の子どもたちが情報の視覚表現の可能性と楽しさを知る機会となっている．将来世代の育成にも力が注がれている．</td></tr>
</table>

政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	SDGsのような国際的な議論における地図の有効活用を提唱している．地理的データセットの可視化はすべてのSDGsの理解促進に有効であるが，特に，ゴール11，13，17との関係が深い． 隔年開催の国際地図学会議では，国際地図展および国際子ども地図展を開催し，約1000点にもおよぶ作品が展示され一般公開されることにより，情報の視覚表現の可能性と重要性についてアウトリーチを行っている．
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	2019年に国際地図学会議東京大会（ICC2019: the 29th International Cartographic Conference）を開催し，75の国・地域から約1000人が参加した．"Mapping Everything for Everyone"を大会テーマとし，特にオープンソースGISを活用したオープンな地図作成や教育，および国連のSDGsの取り組みに関する基調講演などを実施した． また，2003年にはユビキタス・マッピング研究委員会を立ち上げ，現在に至るまで日本から委員長を出して活動している． これらの活動を通して，地図学・地理情報科学を広く社会に普及させ課題解決に寄与するための，先端的な研究や社会実装を一貫してリードしてきている．
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて	ICAはISC（国際学術会議）のメンバーであり，SDGsのような世界的な課題への対処のため，および地図の作成にはデータの標準化が重要であり，最新の動向の把握，国際化における地図情報の共有化などに加入は不可欠である． ICA日本委員会と日本学術会議の共催で開催されたICC2019によって，以下の成果を残すことができた． ・国際地図展や国際子ども地図展などの一般公開プログラムを実施し，国民の地図への関心や国際的な視点を養う機会となった． ・会期後は，G空間EXPO，松山，岐阜巡回展で地図資料の展示を行い，会期中に来場できなかった国民にも機会を提供することができた．さらに，それらの地図資料は岐阜県立図書館に所蔵されることとなり，今後も展示の機会を設けることができる． ・国内学協会（日本地図学会，地理情報システム学会，日本地理学会，東京地学協会，人文地理学会，地理学連携機構など）との連携が強化された． ・会期後，地図学・地理情報科学に関わる若手研究者への補助制度が創設された．
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	国際地図学会議では，若手の発表者に対する旅費等の資金援助制度を協会本部および大会本部の両面より設けており，大会期間中には，若手交流会（Young Cartographers' Social Gathering）を実施している． 地図学及び地理情報科学は，学術・教育・ビジネス・行政のいずれにも関係しているため，学会や大学関係者のみならず，政府，民間企業，非営利団体からも会員を集め，所属，性別，年齢，地理的な面での参加者の多様性を高めることを目標のひとつとしている．

2　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定について（招致等の予定も含め）	2019 年 7 月に国際地図学協会の総会，および国際地図学会議が東京で開催された.
日本人の役員立候補等の予定について	ユビキタス・マッピング研究委員会の後継の研究委員会委員長について立候補を予定している.
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	ICA と国連の共同による "Mapping for a Sustainable World" がより実効力をもつように，日本国内での活用と展開を検討し始めている．今後，この取り組みを国際地図学協会で共有，提案することによって，地図学および地理情報科学の SDGs へのさらなる貢献について国際的に議論する場をつくることを目指す.

3　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況（過去 5 年間及び今後予定されているもの）	総会開催状況	2023 年（予定）（開催地：ケープタウン，南アフリカ）、 2019 年（開催地：東京，日本）、 2017 年（開催地：ワシントン D.C.，米国）
	理事会・役員会等開催状況	2021 年（開催地：フィレンツェ）、2020 年（オンライン開催）、2020 年（オンライン開催）、2019 年（開催地：東京）、 2018 年（開催地：東京）、2018 年（開催地：チューリッヒ）、 2017 年（開催地：ワシントン D.C.）、2017 年（開催地：ブダペスト）、 2016 年（開催地：ワシントン D.C.）、2016 年（開催地：マドリード）
	各種委員会開催状況	2023 年（予定）（開催地：ケープタウン，南アフリカ）、 2021 年（予定）（開催地：フィレンツェ，イタリア）、 2019 年（開催地：東京，日本）、 2017 年（開催地：ワシントン D.C.，米国）
	研究集会・会議等開催状況	2021 年（開催地：オンライン，フィレンツェ，ワルシャワ） 2020 年（開催地：プラハ，ヴァレッタ，ベルリン，クルジュ・ナポカ，ロンドン，レッドランズ） 2019 年（開催地：ワシントン D.C.，テッサロニキ，北京，秋田，ユトレヒト，東京，筑波，シュツットガルト，ウィーン，海口，海南，ミュンヘン） 2018 年（開催地：チューリヒ，パリ，ヴァレッタ，マドリード，オロモウツ，ロンドン，フヴァル，ペトロザヴォーツク，ボン，アンカレッジ，メルボルン，オクスフォード，ウィントフック，深圳，ザダル） 2017 年（開催地：ヴェネツィア，リオデジャネイロ，ユジノサハリンスク，ワシントン D.C.，ウィリアムズバーグ，ライデン，ウィントフック，ウィーン）
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び		2021 年（予定）,国際地図学会議（オンライン,フィレンツェ，イタリア）,20 人程度の発表者を予定（うち代表派遣：若林芳樹）

<table>
<tr><td colspan="2">予定</td><td colspan="4">2019 年,国際地図学会議（東京）,261 人
2017 年,国際地図学会議（ワシントン D.C.，米国）,26 人（うち代表派遣：森田喬）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去 5 年）</td><td>役職名</td><td>役職就任期間</td><td>氏名</td><td>会員、連携会員の別</td></tr>
<tr><td>ユビキタス・マッピング研究委員会委員長</td><td>2019～</td><td>若林芳樹</td><td>（22・23 期）会員・連携
（25 期）特任連携（2021 年派遣）</td></tr>
<tr><td>表彰委員会委員</td><td>2019～</td><td>森田　喬</td><td>（20～25 期）会員・連携
（17 期～）地図学研連委員</td></tr>
<tr><td>大会組織委員長</td><td>2015～2019</td><td>森田　喬</td><td>（20～25 期）会員・連携
（17 期～）地図学研連委員</td></tr>
<tr><td>ユビキタス・マッピング研究委員会委員長</td><td>2015～2019</td><td>有川正俊</td><td>（23 期）会員・連携
特任連携（2015 年派遣）</td></tr>
<tr><td>出版物</td><td colspan="5">1　定期的（年 2 回）　主な出版物名　International Journal of Cartography, ICA News
2　不定期（　　）　主な出版物名　Advances in Cartography and GIScience</td></tr>
<tr><td colspan="6">活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載
（http://www.　　）</td></tr>
</table>

4　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第 3 条、4 条、5 条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規4条第3号）</td><td>委員会名</td><td>地球惑星科学委員会 IGU 分科会 ICA 小委員会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>伊藤香織</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
2020 年 12 月 8 日 第 1 回 ICA 小委員会（主な審議事項：役員の決定，小委員会のメンバー，代表派遣，ICA 動静，第 25 期の活動）
2021 年 2 月 15 日 学術フォーラム「新たな地球観への挑戦：地球惑星科学の国際学術組織の活動と日本の貢献」で ICA の報告
2021 年 6 月 3 日 JpGU ユニオンセッション「地球惑星科学コミュニティと日本学術会議」で ICA の紹介
2021 年 6 月 14 日 第 2 回 ICA 小委員会（主な審議事項：国土地理院との意見交換，ICA の動静，第 25 期の体制と活動）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">内規第3（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
1. 該当する　　２．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載
（ https://icaci.org/files/documents/reference_docs/2015-2019_directory.pdf ）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）

1. 該当する　　２．該当しない

※根拠となる資料の添付又は URL を記載（ https://icaci.org/ica-statutes/ ）</td></tr>
<tr><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに〇印）

ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの

イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの

ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの

エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
<tr><td colspan="2">10 ヵ国を超える各国代表会員が加入している
1. 該当する　　２．該当しない</td></tr>
<tr><td>加入国数及び</td><td>（73 ヶ国）</td></tr>
</table>

	主要な各国代表会員を10記載	・各国代表会員名／国名 U.S. National Committee for ICA / 米国 British Cartographic Society / 英国 Comité Français de Cartographie / フランス Deutsche Gesellschaft für Kartographie / ドイツ Associazione Italiana di Cartografia / イタリア Canadian Institute of Geomatics / Canadian Cartographic Association / カナダ Federal Service for State Registration, Cadastre and Cartography (Rosreestr) / ロシア Geo-Informatie Nederland / オランダ Swiss Society of Cartography / スイス Chinese Society for Geodesy, Photogrammetry and Cartography / 中国